



歴史展示室の本部構内再現模型



ACADE見IC

「京都大学の歴史」 京都大学大学文書館 西山 伸 准教授

今回のACADE見ICではらいふすてーじ300号を記念して、1984年のらいふすてーじ創刊時に京大生であり、「京都大学の歴史」が専門の西山伸准教授にお話を伺った。(椿井)



らいふすてーじ創刊時と現在の比較

—当時の京大—

80年代は、自分の生活がだんだん豊かになっていくということを、学生が実感できた時代じゃないかなあと思います。車を持ち始める学生が出てきたのもこのころです。大学の歴史というレベルで考えてみると、70年代はまだ60年代末の激しい大学紛争の余波が残っていたし、90年代になると今まで続く大学改革が始まったわけで、ちょうどその狭間の80年代は平和な時代だったように思えます。けれど一方では、大学紛争の時に指摘されていた問題に目をつぶって、先送りしていた時代といえるかもしれない。そういう意味ではかきかっつきの「平和」だったのかもかもしれませんね。

学生の様子について言えば、授業に出席しないことはやはり珍しくなかったですね。先生が海外に行っていて、1年間ほとんど授業がない講義もありました。就活も4回生の夏くらいからで、しかも企業の方から「来てください」という感じだったようです。遊びについては、僕は軟式野球の同好会に所属していたのですが、新歓のときに新入生はみんな海パ

ン一丁で鴨川に入って四条から三条まで川の中を歩くという、今では考えられない恒例行事がありました。「学生さんがハメ外すのには目をつぶろうよ」という社会の雰囲気だったんですね。今は周囲の目が厳しくなってるから、遊びにくくなっているというか、ハメを外しにくくなってるんじゃないかなと思います。

—今の京大生を見ていて—

全学共通科目で「京都大学の歴史」という授業を長いこと持っていて、毎回授業が終わる時に受講生にコメントを書いて出してもらっているんですが、それを見ていて思うのは、今の学生は昔と比べておとなしくなっているということですね。授業を持ち始めたころだったら噛み付いてくるようなコメントを書く学生がいたんですけど、今は皆無と言っていいくらいです。

こういう状況を憂えて「昔のほうがよかった」と言う人もいますけど、人の話をきちんと聞かずにむやみやたらに噛み付いてくるよりは、ずっと成熟しているといえるのではないのでしょうか。

百年史と文書館

—現在の研究に至るきっかけ—

僕は文学部の出身で、日本史の中でも近現代史の専攻でした。大学院まではずっと外交史の研究をしていて、京大の歴史についてはほとんど知りませんでした。6月18日(創立記念日)がどうして休みかも知らないくらい。でも1993年の4月、ちょうど僕が博士課程を修了したころ、『京都大学百年史』の編纂の準備が進んでいて、そこで助手をやらないかと声がかかったのでやらせていただくことになりました。そうするともう仕事ですから一生懸命京大の歴史を勉強するようになって、これまでの外交史はやめて、編纂をしながら高等教育史などの研究にシフトしていきました。

—大学史について—

日本の大学はそれぞれの大学史を編纂しているところがとても多いんですけど、京大ほどの規模のものはなかなかありません。日本では大学に限らず会社史なども、その創立時の理念を後世に伝えるなどの理由でよく作られます。でもそれが単に無批判にその組織を称えるもので

京都大学大学文書館

全国初の本格的な大学文書館として設立された、京都大学大学文書館。現在15万点もの大学に関する資料を所蔵している。百周年時計台記念館1Fには文書館が制作した歴史展示室があり、京大の歴史を資料とともに紹介している。



▲当時の写真を用いた展示

「サークル勧誘のビラなども資料となるものなので、集めていて必要なくなったという人がいれば、ぜひ寄贈してほしいです。できればいつ集めたかを明らかにして」とのこと。

寄贈について詳しくは大学文書館のホームページ (<http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/>) まで。



▲1930年ごろの下宿の再現



西山 伸 准教授

1987年に京都大学文学部を卒業、1993年に同大学院文学研究科博士課程を単位取得退学。同年から京都大学百年史編集史料室助手、2001年から京都大学大学文書館助教授。専門は日本近現代史。

歴史を学ぶ意義

歴史学は教訓を引き出すものだというふうによく言われることが多いですね。たとえば、今の政治状況は貧困だとよく言われていますよね。ここから悪い方向に進まないために、状況のよく似ていた1920~30年代の歴史をよく勉強しなきゃいけないよ、というのがその考え方です。確かにその姿勢も大事だと思うのですが、僕が考える歴史を学ぶ意味は、その時代時代の人々の生き様や考えを知ること、ものの見方や考え方を広げることです。これは歴史学に限らず、教養教育一般に言えることだと思います。それぞれの専門に入る前にいろんな学問の見方や考え方を身につけることは、すぐに役に立つことではありません。でも何かあったときに広い視野を持って立ち止まって考えられる人、つまり簡単に流されてしまわない人になってほしい。そのための教養教育なんです。

しかも京大の歴史となれば、同じキャンパスに何十年前にいた、みなさんと同じ学生たちのことですから、なおさらものの見方・考え方の点で参考になることが多いのではないのでしょうか。

京大生にひとこと

よく「大学は価値観を同じくする友人を作るところ」という考え方がありますよね。そういう面を完全に否定するつもりはありませんが、自分のことを棚に上げて言う、やっぱり大学って勉強するところだと思います。授業に出るとか、教員の言うことを全部聞けとかそういうことを言いたいわけではありません。授業を一つのきっかけとして、自分の知的関心を育ててほしいんです。大学には充実した図書設備と、それぞれの分野の専門の教員が揃っています。これだけ勉強に向いた環境の中で、自分のやりたい勉強ができるのは学生のうちだけです。京大は全国でも指折りの設備の整った大学だと思いますから、そういうところにいるということ、ぜひ生かしてほしいですね。

あと、何らかの形で自分の大学生生活の資料を残してほしいな。将来の研究のためにも。一般の大学生の考えることや生活の様子は、なかなか資料に残りにくいからです。

—ありがとうございました。

はみだし
すてーじ

万年リア充のおれが通りますよ。
⇒あなたがここではみだしたおかげで、「リア充」という言葉が資料に残りました。ありがとう。

(工・1 たらここあ)

(まあ万年とかありえないですけど；編)

はみだし
すてーじ

はみだしたら負けかなと思っている
⇒どうだ、敗北の味は甘美かね。

(理・院 あろえりーの)
(僕はここ数年味をしめております；編)